

[制作ノート]

## 個展 『たらない装置たる—weeks with the works—』 における試み

### Experiments in the Solo Exhibition “Sufficiently Insufficient Equipment—weeks with the works—”

坂本のどか

Nodoka Sakamoto

〈抄 録〉

『たらない装置たる—weeks with the works—』とは、2014年10月に玉川大学3号館102展示室にて開催された筆者の個展である。本制作ノートは約一ヶ月という長期に亘る本展における試みをまとめ、筆者自らが改めてその方法、意義、展望を考察すると共に、学生の積極的な参加の記録を残すことを目的としている。

キーワード：たる / たらない、装置、鑑賞者

Abstract

My solo exhibition titled “Sufficiently Insufficient Equipment—weeks with the works—” was held at Tamagawa University in October 2014. The purpose of this production journal is to investigate this long-term exhibition as a platform, to reconsider its contents as well as document active participations of students during the exhibition.

Keywords: sufficient/insufficient, equipment, viewer

#### 1. はじめに

『たらない装置たる—weeks with the works—』とは、2014年10月に玉川大学3号館102展示室にて開催された筆者の個展である。芸術学部の共同研究『Tamagawa Art Gallery Projects』（通称・以後TAG）の一環として企画された本展は筆者にとって、例えば貸しギャラリーなど、他の会場で行う個展とは違った位置づけで取り組むことのできるものであった。そのため、本個展の企画にはシンプルに作品を展示し、鑑賞するという形には留まらないいくつかの試みを含ませた。本制作ノートはその企画段階から実施までの流れを紐解き、再度筆者（＝作家）自らが客観的にその方法、意義、展望な

どを考察することによって今後の活動への手がかりとするためのものである。加えて本展では、TAG 学生スタッフを始め多くの学生の主体的な関わりによって様々な試みを実現された。それらを記録することも目的の一つとしている。

## 2. 展覧会概要

個展タイトル

Tamagawa Art Gallery projects 2014-2015 no. 5 坂本のどか個展

『たらない装置たる—weeks with the works—』

会期

2014年10月6日（月）- 10月31日（金） 11：00-19：00 ※11日（土）、12日（日）、19日（土）休館

会場

玉川大学3号館102ギャラリー

関連イベント・プロジェクト概略

〔アーティストトーク & 3週間の過ごし方指南〕 10月9日（木） 17：00～

〔ためいき week〕 10月13日（月）～ 17日（金）

〔あいまい week〕 10月20日（月）～ 24日（金）

〔枕なげ week〕 10月27日（月）～ 31日（金）

## 3. 展示コンセプト・プラン構想

### 3.1 自作が持つ要素を再考する

本個展を開催するにあたり、既存の自作に共通する要素を再考した。自らの作品の特徴として筆者が常に意識しているのは、曖昧な状態を無機質な入れ物に内包するというやり方である。作品に内包された「曖昧な状態」は声の反復であったり、身体の動きの反復であったりを使って作られている。人は誰しも他者に対しアウトプットせず自分の中に曖昧なまま漂わせているような思考や感情を常に保有しているのではないだろうか。筆者にとっては常にどこか後ろめたいその感覚は、筆者のみならず誰しもが持っている感覚であろう。その後ろめたさを一時的に軽減し、鑑賞者に曖昧をそのままの状態を受け入れることをよしと感じさせるための「装置」、それが筆者の作品である。

### 3.2 ハードウェアとしての「装置」的要素

なぜ「装置」という形態のハードウェアにこだわるのか。ソフトウェアとして内包されている曖昧だけで作品を存在させることはできないのか。曖昧をテーマに掲げながらも、作品化する際に筆者が最も重要視しているのはむしろ作品の形態なのではないかと思える程、ハード（装置）とソフト（曖昧）、双方を併せ持つことやそのバランスを整えることに執着を感じるのである。筆者の「作品化」という行為において、絵画表現等、すべて自分の世界観の中で作り上げることが可能な表現手段が選ばれることは無い。それはなぜなのか。自作における外と内、二つの要素の関係性を探ることは新たな展開に繋がるきっかけになるのではないだろうか。そんな期待から、今回の個展においてはまず「装置」的ハードウェアの部分に注目してみることにした。

そもそも「装置」とはどのようなものを指すのだろうか。下記のごあいさつは、個展案内用DMに掲載したものである。

ごあいさつ（個展案内DMより転載）

Tamagawa Art Gallery Projects（通称TAG）では、芸術教育学科助手坂本のどかの個展を開催いたします。（中略）私の作品は常に「装置」のような様相をしています。鑑賞者が実際に触れられるものや、身を預けられるものなど、それらは鑑賞者の存在があってはじめて成り立つ作品です。

『装置』とはどのようなものを指すのでしょうか？ 機械的なもの？ 何かの役に立つもの？ 私たちは日常的に様々な用途を持った装置を扱いますが、そのほとんどが先に述べたように人、もしくは何かしらの他者の存在が無ければ意味をなさないものです。加えてそれらは時に、本来の用途とは違った使い方をされたりもします。例えば炊飯器というのは本来米を炊くための装置ですが、昨今はその特性を買われ、煮物を作ったりパンを焼いたりもします。

本来の意図とは違った扱われ方をすることは、悲しむべきことでしょうか？ 先の例で考えれば、それはむしろ装置にとって喜ばしいことのようにも思えます。なぜなら使用者がその特性を必要以上に、かつ積極的に理解したがゆえに、装置の潜在能力がさらに引き出され、存在意義が拡張されているからです。（以下略）

—企画・出展 坂本のどか

この挨拶文の中で筆者は、「装置」とは「何かしらの他者の存在が無ければ意味をなさないもの」と書いた。つまり他者の存在が無ければ、装置は未完成であると。

筆者は作品プランを構想する際、常に鑑賞者を含めたスケッチを描く。彼らは作品の脇に佇んでいたり、座っていたり作品のすぐ脇で寝転んでいたり、とにかく人を含めた状態で構想するのである。（図1、2）そのような段階を経て作られる作品は、前述した「装置」同様、当然それだけでは作品としての要素が足りないということになる。

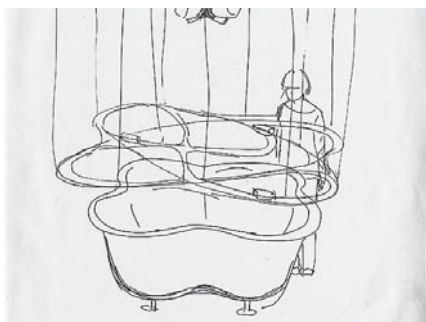


図1 構想時のスケッチ



図2 構想時のスケッチ

### 3.3 「たらない」「装置」たるとは

ここで出てくるのが「たらない（足りない）」という個展におけるもう一つのキーワードである。筆者は今回の個展に、『たらない装置たる—weeks with the works—』というタイトルを用いた。メインタイトルとして「装置」と「たらない」というキーワードを合体させ、さらにその反語である「たる」を付け加えた。

ここでさらに、一般的な捉え方としての「装置」の定義を再確認したい。

1)

あるきまった働きをするように作ってある機械のしかけ。そのようなしかけを設置すること<sup>1)</sup>。

2)

①ある目的のために機材をその場所に取りついたり作りついたりして、作動（効果を発揮）するようにさせること。また、その機材。

②「舞台装置」の略<sup>2)</sup>。

注目すべきは「あるきまった働きをするように作ってある」「ある目的のために」という記述である。ある目的に合わせて作られているということは、別の言い方をすれば他の目的に用いることは考えられていないということである。このように限定的な用途を持った物のことを「装置」と捉えるとき、筆者の頭に浮かぶのはPCやスマートフォンに代表されるマルチデバイスの存在である。それらは一つの個体に様々な用途を持ち合わせており、限定的な用途を持った「装置」とは対極の存在である。少し本論から外れるが、筆者にはこれらのマルチデバイスに対し抱く危惧がある。

### 3.4 氾濫するマルチデバイスによる積極性の退化

まずはプロダクトデザインの観点から述べる。我々の日常生活において、現在ではスマートフォン等に取り込まれ単体で所有する必要が無くなった「ある一定の機能を持った装置」は数多く存在する。電卓や電子辞書、目覚まし時計、カメラ等がそれにあたる。一昔前を思い起こすと、我々は多かれ少なかれ一つ一つこだわりを持ち選んだそれらを所有していたのではなかったか。各メーカーは独自のデザイン性と機能美を打ち出し、消費者にはそれらを比較検討する必要性と楽しみがあった。しかし現在のマルチデバイスのように様々な機能を盛り込もうとすれば、その分ツールのインターフェースには汎用性を持たせなければならなくなる。結果スマートフォンやタブレットからは物理的なボタンはほぼ消え失せ、操作性を持ったボタンのビジュアルがディスプレイに映像として映し出されることとなった。マルチデバイスが台頭することに対し筆者が抱く懸念の一つは、ある一定の用途に合った、もしくは自分が求める操作性に合致したインターフェースデザインを消費者が選びとるという思考が育たなくなっているのではないか、ということである。

二つ目の懸念は、その有り余る利便性にある。便利であることは不便さ、つまり自らが求めている理想に対する現実の「足りなさ」を痛感した経験があってはじめて感じられるものであり、はじめから便利なツールを手にしても使いこなせずその利便性もわからない。不便を感じさせないツールが台頭することによって、不便を知らない使用者は自分なりの理想を思い描いたり、求めたりするきっかけを失うのである。

若者の無気力、無関心が嘆かれて久しいが、筆者が日々接する学生らも例外ではない。休日も家にいたり、海外旅行にも興味が無かったりする学生も多く、自分のテリトリー外の物事に興味を持たない様子がうかがえるが、その原因の一端に手元の便利なツールが関与しているのではないかと筆者は考える。個展を構想する中で生まれた造語「たらない装置」には、現代社会、ないしは日頃接する学生達に感じる疑問に対する筆者なりの思案の結果である、「たらない」ことの必要性を逆説的に説くような意味合いが含まれている。

### 3.5 サブタイトル『—weeks with the works—』

自作の持つ要素を再考察した結果生まれたタイトルが『たらない装置たる』であるとすれば、個展を行う環境等を考慮して加えたコンセプトがサブタイトル『—weeks with the works—』に表されている。個展会場である3号館102展示室は作家自身が常駐する建物内にあり、作家は搬入設営、撤収時だけでなく会期中も常時会場付近にすることができる。設営された作品の近くで一ヶ月近く過ご

することができる機会は作家自身にとっても貴重である。その期間を、芸術学部生をはじめとする鑑賞者と共有すること、そして個展を通して鑑賞者、延いては学生らの積極性を引き出すことに活用できたらという思いから、鑑賞者側からも展覧会に積極的に関わりを持てるような企画を展覧会に盛り込んだ。具体的には、展示会期を週ごとに区切り、各週出展作品の一つをピックアップし作品に関する新たなアイデアを出し、実行してみるという実験的な企画である。展覧会企画概要に記載した『個展関連イベント概略』がそれにあたる。

## 4. 実施報告

ここでは会期中に行ったイベント等について、事前に予定していたもの、実験的に行ったものを含めてその概要を記録として列挙する。

### 4.1 実施企画一覧

#### 4.1.1 第一週：10月6日（月）～10日（金）

##### (1) 8日（水）：アイデア出しミーティング

TAGの学生スタッフを集め二週目以降の為のアイデア出しミーティングを行う。ここで各自各作品を活用するアイデアを出し、その中からセレクトしたアイデアを、該当する週にて実施する。(図3、4)

##### (2) 9日（木）：アーティスト・トーク&炊飯器パーティ（図5）

個展テーマやコンセプトの解説、これまでの活動、作品紹介等を行い、トーク後には懇親を目的としたパーティを実施した。パーティにも個展コンセプトを反映させ、参加者に提供するメニューは『炊飯器』を用いたレシピで作るものに限定した。



図3 アイデア出しミーティング風景

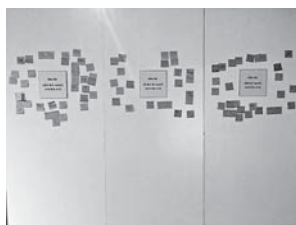


図4 アイデアが書かれた付箋紙



図5 炊飯器パーティ

#### 4.1.2 ためいきウィーク（第二週）：10月13日（月）～17日（金）

会期第二週目は、作品《ためいきまじり》(2007年) (図6) をフィーチャーし、アイデア出しミーティングにて考案したアイデアを学生らが実行する期間とした。以降、第三週、第四週も同様に一つの作品をフィーチャーする。《ためいきまじり》は蛇口を緩めるというインタラクションが伴う作品である。鑑賞者が蛇口を緩めると、蛇口からためいきの音が漏れ出す。

##### (1) アイデア『排水口に雑草を生やす』(VA学科3年田畑柚奈)

道路端の排水溝などから雑草が生えている状況を再現する目的で、学園内で摘んだ雑草が作品の排水口からあたかも生えているかのように配置した。(図7、8)

#### 4.1.3 あいまいウィーク（第三週）：10月20日（月）～24日（金）

作品《Imyemine》(2012年) (図9) は4つのバスタブが合体したような形をしており、上方に設



図6 作品《ためいきまじり》



図7 雑草を生やす学生



図8 雑草部分アップ

置したプロジェクターから、作家自身の頭部が乳白色の湯舟から浮き沈みを繰り返す映像がその底面に投影される。バスタブの形体と同様に、映し出される頭部も4つ（全て作家の頭部）あり、タイミングをずらして浮き沈みを繰り返す。この作品に対する学生らのアイデアとして圧倒的に多かったのはバスタブ内部に入る、もしくは何かを入れる、という類いのものであった。

(1) アイデア『バスタブに入る』(AE学科1年山口大海)

湯は張らず、服を着たまま形だけの「入浴」を行った。(図10)

(2) アイデア『バスタブで寝る』(VA学科4年上田奈津美)

こちらも上記の入浴同様、実際に睡眠したわけではないが、学生はバスタブ底面に横になり、別作品『pillowless』に付属の枕を転用し頭の下に敷き上から布をかけ睡眠の体勢をとった。(図11)

(3) アイデア『悩み事を書いてくしゃくしゃに丸めた紙をバスタブに投げ入れる』(AE学科1年前田浩四朗)



図9 作品《Imymemine》



図10 バスタブに入浴する体勢をとる学生

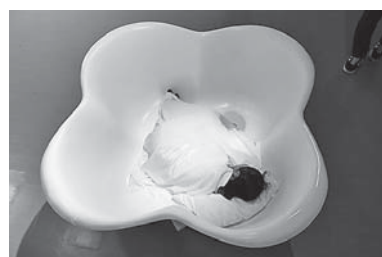


図11 バスタブで寝る体勢をとる学生

作品の脇に紙とペンを置く台を設置し、来場者にその場で今抱えている悩み事を記入してもらう。記入した紙は即座にくしゃくしゃに丸め、バスタブ内に投げ込む。悩み事の大きさに応じて記入する紙の大きさも変える等、アイデアは細かなところまで考えられていた。(図12)

(4) アイデア『バスタブに入ったアーティストの写真を撮影する』(作家自身)

VA学科にて授業「写真A/B」を受け持つ非常勤講師、川村麻純先生に撮影を依頼し実施。撮影時には授業受講生1名も撮影アシスタントとして参加した。(図13)

#### 4.1.4 枕なげウィーク（第四週）：10月27日（月）～31日（金）

作品『pillowless』(2013年)(図14)中央に浮かぶ白いボックスには側面四カ所に各二面ずつスマートフォンサイズのディスプレイが埋め込まれており、その中を複数の女性達が寝返りを打ちながら移動する映像が繰り返し再生される。作品を囲むように箱椅子が配置されているため、参加者が椅子に座り周囲を囲んだ状態で実施するようなアイデアが多く見られた。中でも、参加者同士で対話をする



図12 悩み事を書く机からバスタブを望む



図13 バスタブに入ってアーティスト写真を撮る作家

ようなアイデアが目立った。

(1) アイデア『《pillowles》を囲んでお茶会をする』（作家自身）

筆者を含め4名で作品を囲み、茶話会を行う。(図15)

(2) アイデア『《pillowless》出演者を集め撮影会をする』（作家自身）

本作品は主に当時芸術学部VA学科4年生であった学生らに協力を求め制作した。映像内で寝返りを繰り返す彼女らを、本人達がさらに鑑賞する姿はどんなものだろう。そこからさらに何かが生まれるのではないかと期待からこのアイデアを実行した。撮影時と同様、白い服で作品の周囲を囲んだ。他の鑑賞者と同様に作品を鑑賞したり、周辺の空間で枕投げをしたりする姿を記録した。(図16、17)



図14 作品《pillowless》



図15 茶話会



図16 出演者との撮影会



図17 出演者との撮影会

4.15 プチクロージングイベント『小芝居集団コーンポタージュによるコント』：10月30日（木）

個展のクロージングイベントとして、『小芝居集団コーンポタージュ』を学外から迎え、芸術に関連したコントの上演とアフタートークを行った。(図18)



図18 小芝居集団コーンポター  
ジュによるコント

## 5. 考察と今後の展開について

### 5.1 鑑賞者の領域

今回の企画全体を通じて、筆者は鑑賞者という存在を半ば自分の手のうちにあるものと考えていた節がある。実際には無論そうではなく、展示会場の中で鑑賞者は作家の意図とは関係なく動き回ることが許され、作品を好きなだけ見ること、見ないこともできる。しかし今回の個展では様々な実験を行う際、多くの場合学生をはじめとする参加者は作家の指示や提案を受けて動いた。結果、記録としては既存の作品に対する様々なアプローチが試みられたことになったが、これは世に言う「演出」を作家が行ったと表現した方が正しいのではないだろうか。そう考えたとき、そもそも筆者が思い描いていた「鑑賞者の積極的な参加による既存作品の更なる拡張」とは、どのようなものだったのかと立ちかえることになった。

そこで、今回様々なアイデアを実施した結果、実際に参加者がどういった形で作品、展示に関わったか、いくつかのカテゴリに分け考察した。

### 5.2 ワークショップの参加者的な関わり方

美術作品やアートプロジェクトに対する他者の積極的な関わり方として、代表的なものにワークショップという形が挙げられる。他者と作家、あるいは他者同士の関係性を重要視する場合は多いその形式は、参加型の試行錯誤を狙った今回の個展においては合致する点が多い。会期のはじめに行われたミーティングを手始めに、作家の意図を汲んで参加者がアイデアを出し、試してみるという流れはまさにワークショップ的である。田畑のアイデアや山口、上田の試み(4.1.2-(1)、4.1.3-(1)(2)参照)は細かな点を挙げれば作家にとっても新たな発見があったが、あくまでワークショップ参加者として、つまりは受動的なアイデアに留まった節がある。主体性、積極性という意味では少々乏しく、作家の想像の範疇を超える試みはこの中には現れなかった。しかし、実現にはいたらなかったものの付箋紙に書かれたアイデアの中には作家を驚かせるようなアイデアも多々あり、アイデアをより実行し易い状況、雰囲気作りが必要であったという反省もある。

そんな中、前田のアイデアは参加者ではなく企画者側に回ったものであり、印象深い。彼のアイデアを実行するには更なる参加者が必要であり、彼は他の鑑賞者が楽しむことのできる設えを作った、いわばワークショップの仕掛人に回ったのである。そういった意味では他のアイデアと一線を画し、彼のアイデアは作家の意図とはまた違った、作品の新たな使い方を提示していた。

### 5.3 演者としての関わり方

先にも述べた通り、今回の実験では結果的に多くの場面で作家側からの演出とも言える指導、提案



があった。企画実施前からある程度予測していたものだったが、今回の個展において、演出という手法が一番意識的に使われたのは『《pillowless》出演者を集め撮影会をする』である(4.1.4-(2) 参照)。筆者は集った女性達に白い服を着ることを促し、作品の周囲に配置した彼女らの大まかな動きもほぼすべて指示を出した。これはまぎれも無く演出行為であり、実施前や実施中にはそのいわゆる「ヤラセ」感に少々戸惑いがあった。しかし出来上がった記録は筆者にとって新たな可能性を見いだせるものであり、かつ作品だけでは語り切ることのできない部分を、彼女らの存在が補填してくれているようにも感じられた。作家の演出ありきで作品の周囲を取り巻く人々は、思えば作家が作品構想時にスケッチに描き込んでいる人々と同意義であり、作家自身がその存在をすんなりと受け入れることができたとしてもなんら不思議はない。鑑賞者にそのありようを委ねていた部分を作家が操ることも、今後の展開を探る上では有効なのかもしれないと、今回の試みを経て感じた。

#### 5.4 作品が日常に介入する

これは鑑賞者の関わり方というよりも、作品の在り方の問題である。今回の試みの中ではお茶会(4.1.4-(1) 参照)が例として挙げられるが、この場合人々は鑑賞者としてでもなく、ワークショップ参加者としてでもましてや演者でもなく、ただ日常を過ごす人としてそこに在る。普段何気なく友人達とお茶を飲み他愛もない会話をするその場を形作っているのがたまたま作品であったというだけである。人々は終始作品としての設えに気づく必要はなく、それはパブリック・アートとしての在り方と言った方が適切だろうか。この場合、作品として重要になってくるのは第三者の視点から見た際の面白みである。作品に一番近いところで関わっている人物のみならず、作品とその人物を更に一步離れた位置から見る視点の重要性は、作家自身が挙げている自作に共通する特徴とも合致する。今回の個展においてはホワイトキューブでの展示であったため、あえて作品としての在り方を強調するような、日常への介入とはいわば正反対の形式をとったが、作家の作品はそのどれもが日常的な行為を想起させる形体をとっていることもあり、その在り方として、作品の側から人々の日常に入り込んでいくという方向性も十分に考えられる。

## 6. まとめ

以上の考察を踏まえて見えてきた今後の展開の可能性として、「演出」と、「非演出」という一見正反対と思える二つの方向性が見えてきた。その行為自体は正反対と言えるかもしれないが、それを受け止める作品の、人ありきの装置という在り方に違いはない。その方向性は具体的には先に述べた、作品の周囲に「演出」された演者を配置するというやり方と、反対に作品を人々の日常に溶け込ませ、人々に作品を作品として意識することを強いることなく作品を存在させる方法の二つである。

どちらにせよ、やはり重要となるのは作品とそれに直接関わる人間を更に鑑賞する第三者の視点である。演者が意図を持って作品に関わる場合も、不特定多数の人々が作品を意識することなく、作品を利用したとしても、更なる第三者が鑑賞者として存在することで作品をさらに拡張させられる可能性は大きい。

第三者の視点構築については、これまでも意識していなかったわけではないが、それはあくまでも作家の特権として制作者側でのみその視点を楽しんでいたに過ぎなかった。しかし今後さらに作品を展開していくにあたり、鑑賞者側にもこの立ち位置を提示してみる価値はありそうである。

以上を持って、個展『たらない装置たる—weeks with the works—』における試みの報告、及び考

坂本のどか  
Nodoka Sakamoto

察とする。

### 謝辞

この度の個展開催において、貴重な機会を与えてくださったTAG関係教員各位、及びTAGスタッフ学生をはじめ様々な面で展覧会に積極的な関わりを持ってくれた学生達にこの場を借りて感謝を申し上げます。

### 注

- 1) 林四郎監修、篠崎晃一（編修代表）、相澤正夫・大島資生編著『例解新国語辞典 第八版』三省堂、2012年、679頁
- 2) 山田忠雄他編『新明解国語辞典第七版』三省堂、2011年、865頁